

KBI実践神学シンポジウム
—これからの教会は、何を判断し、どう進めば良いのか？—

21世紀 “ポスト・モダニズム”時代に神学をする

—広義の福音主義“創造論”再考の手がかりとして—

2012.11.16

—宮基督教研究所

安黒務

序①：ポストモダン時代に神学をすること エリクソン著『キリスト教神学』第一巻 p.187-188

- ポストモダンへの移行について我々がどんなことを述べ、またいかなる評価を下すとしても、それが実際に起っており、モダンの時代が移り変わり、過去のものになりつつある事実は認識しなければならない。
- だが、ポストモダニズムは、将来生起する文化や思想の最終的な形ではないことにも留意しなければならない。おそかれはやかれ、どんな形を取るにしても、我々がここで「ポスト・ポスト・モダニズム」と呼ぶものに置き換えられることになるだろう。我々はあえて自らを、過ぎ去っていくものにあまりにも深く結びつけるべきではない。
- まず留意したいのは、我々がここで提案しようとしているのは、単純にプレモダンの時代に戻るのではなく、真剣にポストモダンの見方に備えるということである。我々の神学の内容はプレモダンの神学の内容と大差ないかもしれないが、モダンの時代を通過しており、モダンが導入した幾つかの変化を無効にできないし、またそのようにすべきではない。...科学技術の業績は多くの価値ある要素を含んでいる。...我々は、あたかも地質学が地球の年齢のある程度の知識さえも与えないかのようにして、神学することはできないし、そのようにして神学をする必要もないのである。

序②：三つの時代の特徴

エリクソン著『キリスト教神学』 I 卷七章ポストモダンと神学

| | プレ（前）・モダニズム -1789 | モダニズム（現代） 1789-1989 | ポスト（後）・モダニズム 1989- |
|------------------|---|--|---|
| 特徴の比較 | <ul style="list-style-type: none"> • 素朴な時代 • 垂直的二元論 • 神中心 • 天上への関心 • 超越的世界 • 神による創造 | <ul style="list-style-type: none"> • 合理主義 • 水平的二元論 • 人間中心 • 地上への関心 • 観察可能な世界 • 生物学的進化論 | <ul style="list-style-type: none"> • 非合理主義 • 主観主義 • 多元主義 |
| モダニズムに対する 不満 | | <ul style="list-style-type: none"> • ビッグバン理論が「宇宙発生への問い？」⇒自己充足的宇宙観の崩壊 • 合理的な倫理・道徳の探求⇒伝統的価値観の崩壊 • 二つの大戦⇒進歩への楽観主義の崩壊 | |
| 急進的 ポスト・モダニズム | | | <ul style="list-style-type: none"> • 文芸批評—文芸批評家自身が作品の意味を決定する • 哲学—共同体の文脈の中において真理である • 歴史—普遍的な真理よりも創造的な解釈重視 |

発題概要：ポスト・モダニズムとは何か？

「その意味と福音理解への影響」

—宇田・エリクソン・ウェーバーからのガイドラインの示唆—

1. ポスト（後）・モダニズムの意味^[6]：宇田進著『福音主義神学』より

- a. プレ（前）・モダニズム時代と聖書（～1789）：合理主義以前の時代—批評的研究以前...聖書の要約的機能
- b. モダニズム（現代）時代と聖書（1789～1989）：合理主義の時代—聖書の批評的研究...学問的機能
- c. ポスト（後）・モダニズムと聖書（1989～）：合理主義から非合理主義への時代—批評的研究以後...統合的方向性→物語神学

2. ポスト・モダニズムの福音理解への影響^[6]：エリクソン著『キリスト教神学』より

1. エリクソン著『キリスト教神学』にみるポストモダニズムの影響

- a. 聖書観への影響：エリクソン神学の「一般啓示論、特別啓示論、靈感論、無誤性論、權威論」にみる変化→時代性と目的性
- b. 聖書解釈方法論への影響：哲学・批評的研究・言語観を背景にしたエリクソン神学の「今日化・ポスト・モダン化への神学の定義、方法論」にみる変化→歴史的權威と規範的權威
- c. 福音理解のあり方への影響：エリクソン神学の「神論、人間論、キリスト論、聖霊論、救済論、教会論、終末論」にみる変化→狭義の創造論と広義の創造論、他多数

2. ウェーバーとコリンズにみる「福音主義創造論」の多様化の様相^[18]：Webber“*The Younger Evangelicals*”, コリンズ著『ゲノムと聖書』より

- a. 「創造の物語」に関する今日の神学的状況と動向に関する分析と情報の提供
- b. 「創造の物語の解釈」に関する注目すべき問題点と主要な争点の指摘
- c. 「創造」に関する福音主義諸教会の核をなす信念体系の確認と一層の掘り下げへの呼びかけと材料

1. ポスト（後）・モダニズムの意味：物語神学①

宇田進著『総説福音主義神学』pp.285-288

際限なき断片化→メッセージの統一性の回復

- 物語神学の立場を簡潔に表現するならば、聖書の歴史的文献的成立過程を遡行的かつ通時的に探究してきた近代の歴史的・批評的研究は、教会に聖書の正典“際限なき断片化”、いや“解体”という危機的現実を突きつける結果となった。そのため今日では聖書を正典として読む読み方が崩れてしまい、聖書が教会から奪われてしまったのである。...このような事態は、リベラリズムによる「近代性」あるいは「現代性」への還元の方法の結果とその限界とを示す。
- 物語神学は、こうした重大な“行き詰まり”の状況を深刻に受けとめ、その超克の道を探るのである。具体的には、聖書を字義的にとったり、命題的な真理を強調する伝統主義への復帰ではなく、新しい道を求める。それは、「物語」という“新しい文学的ジャンル”に着目し、それによって見失われてきた聖書の“総体”、あるいはある種の“統一性”というものと、聖書のインパクト、あるいは“メッセージ性”とを取り戻そうとする、一つのポスト・モダンの試みである。
- 近代は、“科学的な知”のあり方を万能として、“物語的な知”のあり方を前近代的なものともみなし排除してきた。しかし、ポスト・モダンの立場から“物語的な知”の復権が叫ばれてきた。

1. ポスト（後）・モダニズムの意味：物語神学②

宇田進著『総説福音主義神学』 pp.285-288

- 旧約聖書は、神とイスラエルの物語であり、福音書もイエスの人物史ではなく、イエスとの出会いによってもろもろの影響を受けた聖書記者たちをはじめ接した人々によって語り継がれた物語である。...また人間の経験は、基本的には物語の形をとって語り継がれる。我々は、まさに物語に囲まれ、物語の中で生活している。
- 本来、キリスト教信仰は、神の存在や神の世界に対する計画などに関する特定の形而上学的教説や世のもろもろの世界観に対抗する一つの世界観でもなければ、また命題的真理や教理の知解とその受容といったものではなく、個人の生や共同体のあり方を啓発させるところの「生きた信念」とでも言うべきものである。
- 物語の真理性は史実的歴史の提供にあるのではない。むしろ、それを読む我々を実存的に照明し、我々を新しい意味、ある枠組みあるいはビジョンに目覚めしめ、我々のうちにそのためのコミットメントと共同体とを生み出し、かつそこへ導くところの作用・効果・影響力にある。
- また、福音理解と伝達においても、物語は人間の審美的感性と想像力をかりたて、あわせて「絵画的迫力」をもった言語活動の様式であり、論理実証主義や合理主義による“理性のパラノイア(編集症)”がきびしく反省されつつある今日のポスト・モダンの知的状況にもよりマッチする。
- 物語神学は、確かに歴史的・批評的研究の限界と問題性とを再確認しつつ、物語という文学的・審美的ジャンルに注目することによって、フォーカスを今一度聖書に集めた。...また、科学的な言語のみを真とする論理実証主義の立場に対し、...宗教的言語の意義と権利を立証することになった。

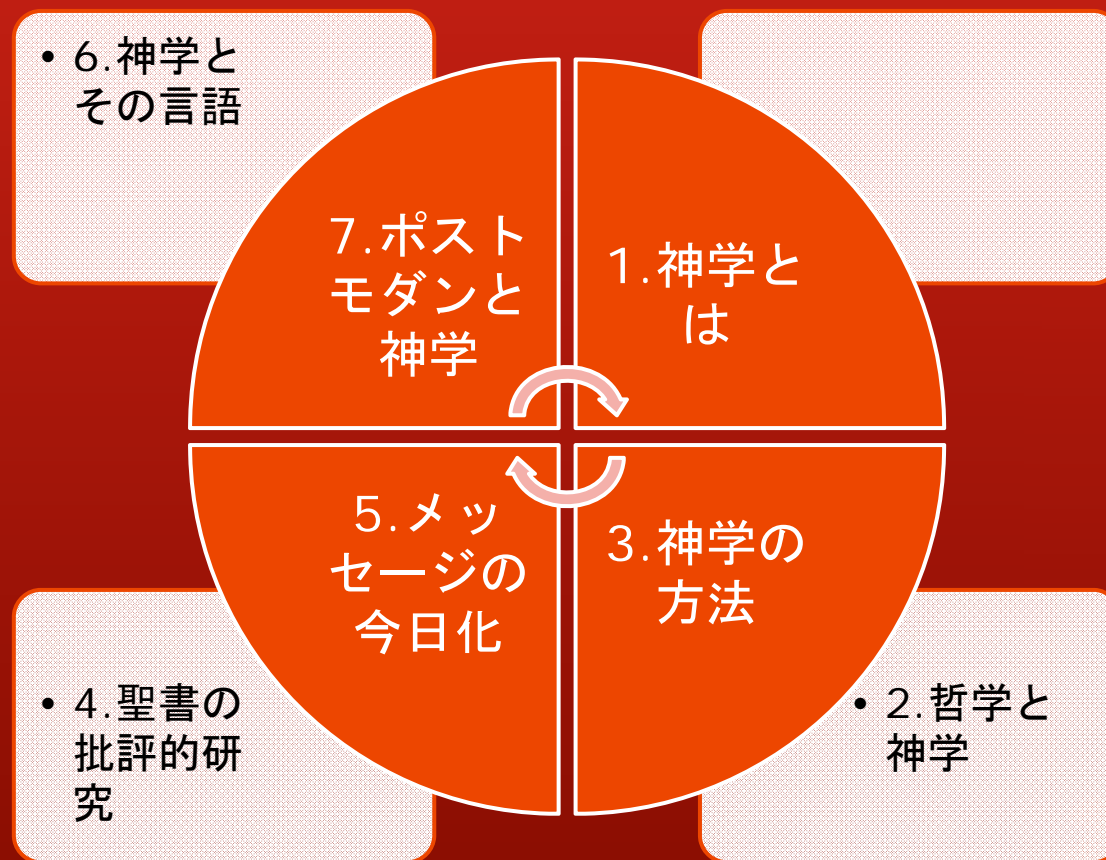
1. ポスト（後）・モダニズムの意味：物語神学③

宇田進著『総説福音主義神学』 pp.285-288

- しかし、次のような問題性も見落とすことはできない。
- 1. まず、聖書は神の存在に関する情報や世界と人類に対する神の意志・計画を伝えるものではないと考えている点などから、信仰が内蔵する形而上学的側面の意味・解明が不十分ではないかと思われる。
- 2. 次に、聖書を主として宗教的想像力の啓発と鼓舞という機能面からのみ扱い、聖書が人類に対する神的真理に関する預言者的告知の書であるという側面や、聖書の普遍的規範性の立証が欠落しているという問題も認められる。
- 3. そして、神学の概念の問題であるが、物語神学において、神学は神と世界に関する神の“経綸”の解明と立証という働きから離れ、特定の信仰伝統に関する一種の“記述的”な営為、またその伝統へのより深い関与を呼びかける“喚起的”な学にとどまっているという問題も認められる。

2-1. エリクソン著『キリスト教神学』等に見るポストモダニズムの影響

① エリクソン神学の構成



2-1. エリクソン著『キリスト教神学』等に見るポストモダニズムの影響

② 聖書観への影響・神学と無誤性の定義のシフト

○ 神学の定義

- 「第一義的に聖書を基盤とし、文化一般の文脈の中で、今日的な表現を用いて、生の諸問題に関連付けながら、キリスト教の諸教理についての首尾一貫した言明をするべく努める学である。」 p.17
- 「神学はまた、一般の文化と学問で扱われている諸問題にかかわる。したがって、神学は、事物の起源についての見方を、科学が発展させた概念に...関係づけようと試みる。」 p.17
- 「我々は、あたかも地質学が地球年齢のある程度の知識さえも与えないかのようにして、神学することはできないし、そのようにして神学する必要もないのである。」 p.188
- →天文学（天動説と地動説）、地質学（地球の年代）、生物学（進化論）、人類学（人間の起源）との対話（同伴すべきパートナーとして） I -p.147

○ 靈感と無誤性の定義

- 「聖書の靈感とは、聖書記者たちに対する聖霊の超自然的影響を意味する。そのことによって、彼らの文書を啓示の正確な記録とし、また彼らの書いたものを実際神の言葉であるように結実させたのである。」 p.254
- 「聖書は、それが書かれた時代に文化と伝達的手段がどれくらい発達していたかということを考慮に入れて、またそれがどのような目的で与えられたものなのかという視点で正しく解釈するなら、すべての記述について完全に真実である。」 p.295
- →聖書テキストを説明する上でのさまざまな困難を、ただちに誤謬のしるしであると、性急に判断すべきではない。十分な資料が得られるまで、すべての資料が入手できれば問題は解決されるという確信を持ちつつ待つべきである。 II -P.299

2-1. エリクソン著『キリスト教神学』等に見るポストモダニズムの影響

③ポスト・モダニズム時代における聖書解釈の動向

| | プレ・モダニズム -1789 | モダニズム 1789-1989 | ポスト・モダニズム 1989- |
|--|---|--|---|
| Joseph Clair "Christian Thought" course at Wheaton College | <ul style="list-style-type: none"> • Pre-critical Naivete • 批評的研究方法以前の素朴さ | <ul style="list-style-type: none"> • The Critical-Thinking Desert • 批評的研究方法の無味乾燥さ • 本文・文献批評、様式史・編集史批評、歴史的・比較宗教批評、構造・読み手応答批評等 | <ul style="list-style-type: none"> • Post-critical Naivete • 批評的研究方法以後の素朴さ |
| 啓蒙思想下での学問研究の進展と、創造の物語の解釈の複雑化・多様化 R. Webber "The Younger Evangelicals", 他 | <ul style="list-style-type: none"> • アダムとエバは即座に創造。 • 神は文字通りの七日間で世界を創造。 | <ul style="list-style-type: none"> • 天文学(天動説⇒地動説) • 地質学(地球の年代) • 生物学(進化論の問題) • 人類学(人間の起源) • 心理学(人間観の問題) • 精神医学(精神の健康の問題) | <ul style="list-style-type: none"> • 創造の起源は神秘、創造の説明は讃歌。 • 有神論的進化論(神によって引き起こされた進化)は、科学の領域で働いている福音主義者。 • 創造の物語は神話。 |
| 創造の年代 M.J. エリクソン 『キリスト教神学』第18章 神の原初のみわざ：創造 | <ul style="list-style-type: none"> • アッシャー主教「一日は24時間、天地創造はBC4004年」 | <ul style="list-style-type: none"> • 現代地質学の発展一層序地質学者 • W. スミス(1839没) • C. ライル(1875没) • 放射性物質の特徴による地質年代測定法 • 地球の年齢一数十億年、 | <ul style="list-style-type: none"> • 断絶説 • 洪水説 • 理想上の時点説 • 日を絵画的にとる説 |

2-1.エリクソン著『キリスト教神学』等に見るポストモダニズムの影響

④宇田進編『ポスト・ローザンヌ』より

- ポスト・モダニズムの状況下におけるコンテクスチュアリゼーション
- 忘れられてはならない大事な点があります。それは、それぞれの国のさまざまな文化の中で、教会は聖書のメッセージをどのように解釈し、どのように提示し、どのようにそれに従い、かつ生きようとしているのか、という宣教上の中心的問題を、新しい自覚をもって掘り下げる端緒を提供したという点です。
- 実はこれが、最近宣教論の中心的テーマのひとつとなってきた“コンテクチュアリゼーション”、つまり福音を私たちの生のコンテキストや私たちの文化的・社会的・歴史的状況に正しく翻訳し、真の意味で福音を受肉させるという課題にほかなりません。
- 私たちすべての悲願は、“深みの伝道”と“教会の成長”です。そのことを達成するためには、“コンテクスチュアリゼーション”は私たちにとって不可避の課題です。
- →私たちは、“ポスト・モダニズム”という歴史的状況の中で、創造の物語をどのように解釈し、どのように提示し、どのようにそれに従い生きようとしているのか？

2-1. エリクソン著『キリスト教神学』等にみるポストモダニズムの影響 牧田吉和『終末論』講義

⑤ 「序論 第五節 終末論の取り扱いにおける基本姿勢」より

- 「終末論」を取り扱う場合に、人間の思弁に注意すべきである。「終末論」は、終末的未来像を問題にするために人間の好奇心を駆り立ててやまない。それだけに人間の自由気ままな思弁が闊歩する可能性があるからである。
- 歴史を見れば、それが単なる可能性にとどまらず、「終末論」において様々な異端が出現した。したがって「終末論」においては、「聖書的境界」の概念が確認される必要がある。
- 第一に、「聖書的境界」は消極的意味をもつ。すなわち、教会も神学も、「終末論」において、聖書の啓示が許す限界を超えて、聖書の啓示が明らかにするところとは異なって思弁してはならないということである。聖書には終末についての事柄のすべてが啓示されているわけではない。また、啓示されているすべてのことが確実に知られているわけでもないことを確認しなければならない。この限界をわきまえて、「終末論」についての神学的営みをなさなければならない。
- 第二に、「聖書的境界」は積極的意味をもつ。教会も神学も、「終末論」において、聖書の啓示するところを、その限界内で人間的思惑による留保なしにその真理を余すところなく告白し、信じ、期待しなければならない。
- 以上の二重の意味において、我々は「終末論」において聖書の弟子にとどまる姿勢を必要としている。
- → 「終末論」を「創造論」に置き換えて、「創造論」の取り扱いの基本姿勢を確認する必要がある。「創造物語」において啓示されているものは何であり、何でないのか。啓示の限界線はどこにあり、私たちはそれを余すところなく取り扱っているのか。狭義の創造論のみならず、広義の創造論の探求は可能なのだろうか。

2-1. エリクソン著『キリスト教神学』等に見るポストモダニズムの影響 牧田吉和著『改革派信仰とは何か』

⑥5-2-2 予定論の急所としての「救済論的視点」より

- 誤解された予定論は、決定論に基づく予定論であり、私たちを運命論の奈落の底に突き落とすこととなります。
- このような誤解を避けるために、予定論を見つめる視点が重要な意味をもってきます。この視点を、予定論を考える場合の「救済論的視点」と名付けておきたいと思います。
- 第一に、予定論を学ぶ場合には、「御言葉に啓示されたあなたの御意志に、注意深く耳を傾け、従うこと」、すなわち聖書の語るところに耳を傾け、聖書の語るところを語り、聖書の黙するところでは黙して止まる、という宗教改革的姿勢が守られなければならないことです。第二に、「信じてキリストを受け入れているという事実」から出発して学ぶ必要のあることです。
- 宗教改革者たちは、抽象的な絶対的存在や主権性という概念から予定論を導き出したのではありませんでした。誤解の根本原因はこの点にありました。宗教改革者たちは、人間の全的墮落・全的無能力性を心から告白し、イエス・キリストにおける福音の神を発見し、イエス・キリストを受け入れ、現実にその救いにあずかったのです。同時に、彼らは、救いの恩恵性を心から告白し、究極的には神のキリストにある永遠の選びにまでその恩恵性を徹底させ、一切の栄光を神に帰したのです。
- 改革派信仰が、たとえ神論を支点とし、神の主権性と自由を重んじ、予定論を堅持したとしても、永遠の選びの告白に至ったこの道筋を見失わないことが決定的に大切です。宗教改革者たちがたどったこのような認識の道筋にこそ、予定論の「救済論的視点」があります。
- 一言でいえば、予定論とは「信じてキリストを受け入れているという事実」から出発して、すなわち自分自身のあるいは神の民の救いの事実から出発して、その究極的根拠としての永遠の選びの認識に至るといふ信仰の〈頌榮的告白〉です。
- →福音派における「創造物語」解釈の多様化の課題にも援用できる捉え方である。Webberは、①七日間-24時間説（ファンダメンタリスト）、②創造讃歌説（ヤング・エヴァンジェリカルズ）、③有神論的進化説（福音主義に立つ科学者たち）、④神話説（より若い福音主義者たち）の四類型を示している。ここで大切なことは、相違する立場を一刀両断に断罪するのではなく、それぞれの立場に至った背景、それぞれの視点、それぞれの解釈のプロセス、そして結実を丁寧に確認することである。

2-2. ウェーバーとコリンズにみる「福音主義創造論」の多様化の様相

① ポスト・モダニズム時代における

創造物語解釈の位置づけ：広義の創造論の多様性

| (保守的) 右派 | 中道右派 | 中道左派 | 左派 (革新的) |
|---|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> アッシャー主教 ファンダネンタリズム ヤング・アース派 ヘンリー・モリス「創造科学」 | <ul style="list-style-type: none"> 村瀬俊夫著『聖書の中心的流れ』 ヤング・エヴァンジェリカルズ オールド・アース派 エリクソン「漸進的創造論」 | <ul style="list-style-type: none"> 科学の領域で働いている福音主義者。 コリンズ著『ゲノムと聖書』 | <ul style="list-style-type: none"> ポーキングホーン著『科学者は神を信じられるか』他、邦訳多数。 ランドン・ギルキー ヤンガー・エヴァンジェリカルズ |
| <ul style="list-style-type: none"> 「一日は24時間、天地創造はBC4004年」 創造の物語を科学的次元で取り扱う | <ul style="list-style-type: none"> 創造の起源は神秘、創造の説明は絵画的描写—神学の専門家として、神の聖定・摂理の内容を科学的学識と関係づける | <ul style="list-style-type: none"> “バイオ・ロゴス”有神論的進化論(無神論的進化ではなく、神によって引き起こされた進化)—科学の専門家として神の聖定・摂理の内容を科学的学識でかたちづくる | <ul style="list-style-type: none"> 創造の物語は神話的描写。 |
| <ul style="list-style-type: none"> 極端に一字一句字義通りに解釈 信仰が科学に勝る 科学との対決的姿勢 (対決型) | <ul style="list-style-type: none"> 創造物語を軸に、科学との対話 (対話型) 科学が神の助けを必要とする | <ul style="list-style-type: none"> 科学的知識を軸に、神学と対話 (対話型) 科学が信仰と調和する | <ul style="list-style-type: none"> 科学“How”と信仰“Why”の明確な役割分担をする (分離型) |

②狭義の創造論：ヤング・アース説

- 「創造論者」というレッテル—額面通り受け取るなら、「神が宇宙の創造に直接関わったのだ」と主張する人たちを指す。その広い意味では、すべての有神論者は、自らを創造論者に数えるべき。
- しかしながら、過去100年余り、一部の特定層を指す言葉として乗っ取られ、固有名詞化されてしまった。
- 具体的には、創世記1・2章を宇宙の創造と地球上における生命の形成に関する記述を一字一句文字通りに解釈すべきだと主張する人々を指すようになった。
- 一般に、「若い地球の創造論（ヤング・アース派）」と呼ばれる最も極端な見解は、この「六日間で創造」の箇所の日を文字通り24時間と解釈し、従って地球の年齢は一万年以下であると結論づける。
- 若い地球論者は、変化と自然選択によって、それぞれの種の中で起きる小進化の概念は一般に受け入れているが、種分化や新種への進化をもたらさとする大進化の概念は拒絶する。

2-2. ウェーバーとコリンズにみる「福音主義創造論」の多様化の様相

③ インテリジェント・デザイン論

- インテリジェント・デザイン（知的な設計）とは、要するに何なのか。
- 主張①：進化論は無神論的世界観を促進するものなので、神を信じる者は、それを拒否すべきである。
- 主張②：進化論には緻密で複雑な自然を説明できないという根本的な欠陥がある。
- 主張③：進化論が還元不能の複雑性を説明できないのであれば、進化の過程に介入し、必要な要素を提供した知的な設計者（デザイナー）がなんらかの形で存在したはずである。
- ID論が提唱するダーウィン主義への反論は、表面的にはとても説得力があるように思える。しかし、ID論の論理が本当に科学的に見て優れたものであるなら、その考えをさらに追及しようと、第一線で活躍する生物学者たちがこぞって興味を示すはずではないだろうか。生物学者の中にはかなりのクリスチャンがいることを思えば、なおさらのことである。
- しかし、現実にはそのようなことにはなっておらず、科学界の主流では、ID論は今でもほとんど信頼性のない亜流の活動と見なされている。
- ID論は実験的検証をすることもできず、還元不能な複雑性というその中心的な主張を支えるための確固たる基礎もなく、科学的に立ち行かない理論なのである。
- ID論は、科学では説明できないとされる部分には超自然的な神の介入があったとする「隙間の神」理論である。
- しかも、ID論は、全能の神をあたかも不器用な創造者のように描いてしまう。生命の複雑さを最初に造り出したのが神自身であるなら、なぜそうたびたび介入して、不適切な部分を手直ししなければならないのか。到底想像できないような神の崇高な知性と天才的創造性に畏れかしこむ信者にとって、そのような神のイメージは満足のいかないものである。

2-2. ウェーバーとコリンズにみる「福音主義創造論」の多様化の様相

④ バイオ・ロゴス（有神論的進化論）： a. 参考文献

- グーグルの検索エンジンで調べると、「有神論的進化論」は「創造論」の十分の一、「インテリジェント・デザイン論」の140分の1しかヒットしない。しかし、現実には、真剣な信仰者であり、真剣な生物学者である人々の間では、有神論的進化論こそがもっとも有力な立場なのである（「ゲノムと聖書」）。—ということなので、下記に参考となる日本語の良書を紹介する。
- 福音派における**第三の立場**：神が進化を引き起こされたとする立場。科学の領域で働いている多くの福音主義者に支持されている。福音派の信仰に立ちつつ、「有神論的進化論」の立場の日本語の良書
 - フランシス・コリンズ著『ゲノムと聖書』NTT出版...米国国立ヒトゲノム研究所の所長、国際ヒトゲノム計画のリーダー。10年を超える歳月と30億ドルの予算での、ヒトゲノムの全塩基配列を解析計画を2003年完成、歴史に残る画期的な成果を納めた。内容は、「宇宙の起源（ビックバンと太陽系と地球の形成）、地球上の生命（化石の記録、ダーウィンの考え、遺伝因子DNA）、神聖なる解説書を読み解く（ゲノムとターウィンと人間の進化）、創世記は本当何を語っているのか、無神論、創造論（創世記は一字一句解釈すべきなのか）、インテリジェント・デザイン、バイオ・ロゴス（有神論的進化論）等についての分かりやすい説明。
 - 大谷順彦著『進化をめぐる科学と信仰』すぐ書房...同盟基督教団会員、日米の大学で教授、筑波大学・国立研究機関・民間企業の研究所等に勤務する研究所が多く出席する教会で、成人科の学びを教え、日本福音主義神学会東部部会研究会で「進化論と聖書」を発題。内容は、「科学と信仰、生物学と進化生物学、進化論とキリスト教、創造の記述の聖書解釈、福音主義キリスト教と進化論等」
- 福音派における**第四の立場**：福音派の中でさらに進んだ立場のシリーズ...創世記物語は「神話」として、一般に福音派の中ではあまり主張されない立場。ただ、より若手の福音主義者の間で広範に支持されているこの立場は、J.ポーキングホーンにより理路整然と語られている。
 - J.ポーキングホーン著『自然科学とキリスト教』『科学と宗教—ひとつの世界』『世界・科学・信仰』『科学者は神を信じられるか』『科学時代の知と信』の邦訳書。...ケンブリッジ大学の数理物理学の教授の後、英国国教会の司祭となった。科学と信仰のパートナーシップ関係についての多数の著作がある。

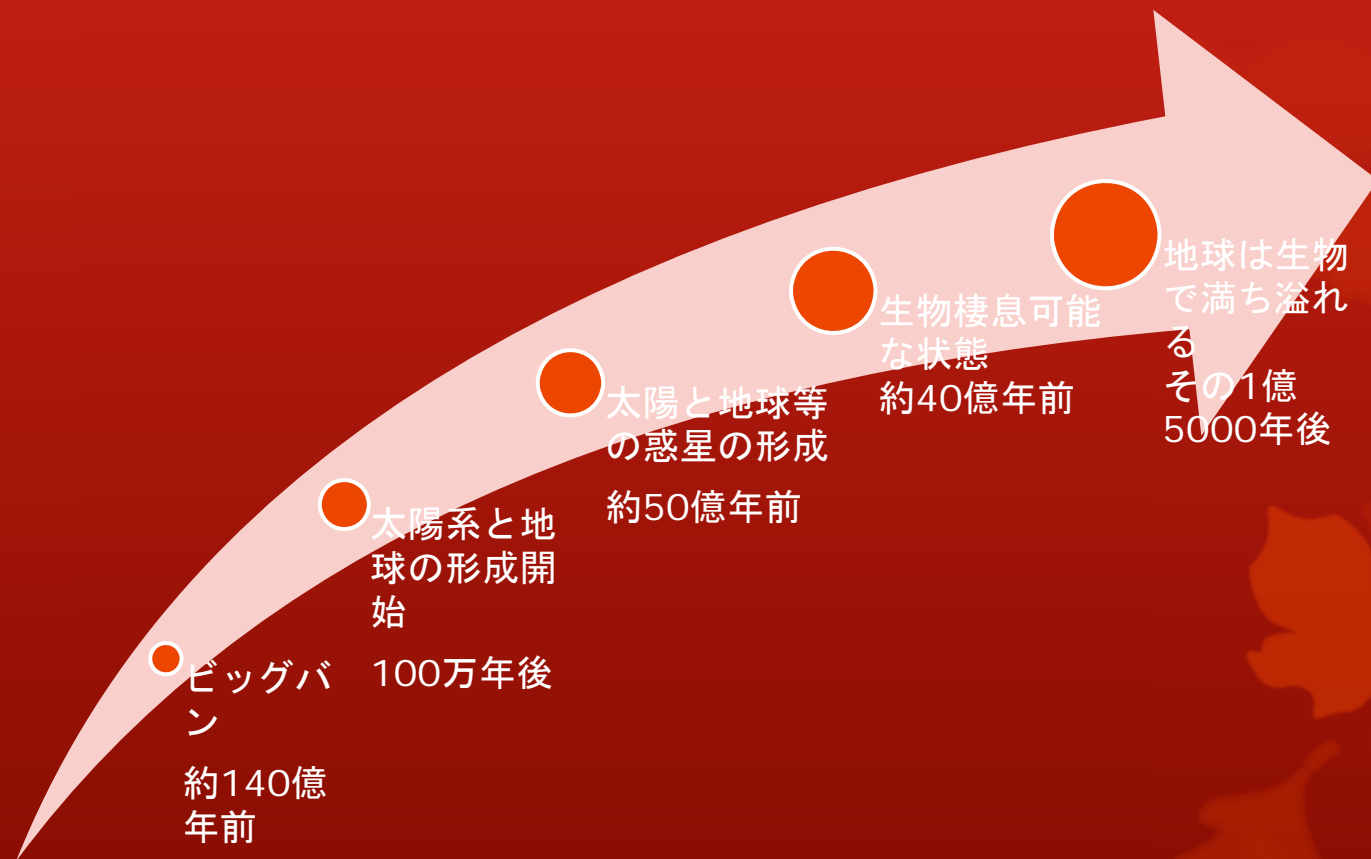
2-2. ウェーバーとコリンズにみる「福音主義創造論」の多様化の様相

④ バイオ・ロゴス（有神論的進化論）：b. 有神論的進化論とは何か

- 有神論的進化論は、細かい点では多くの差異があるものの、その典型的なものは以下の前提の上に成り立っている。
 1. 宇宙は、140億年前にまったくの無から現れた。
 2. 宇宙の物理定数は、生命が生存できるように寸分の狂いもなく正確に調整されているようだ。
 3. 地球上での生命の起源の正確なメカニズムはまだ解明されていないものの、生命が現れてからは、進化と自然選択の過程を通して、長期間を経て生物的多様性と複雑性が発達していった。
 4. 進化の過程が始まってからは、特別な超自然的な介入は必要ない。
 5. 人間もこの過程の一部であり、類人猿と共通の祖先を持つ。
 6. しかし人間には、進化論では説明できない唯一無二の部分もあり、その霊的な性質は他の生物に例を見ない。これには道徳律（善悪を知る知識）や神の探求などが膨れ、歴史を通してすべての人間の文化に見られる特質である。
- 以上の六つの前提を受け入れるならば、知的にも満足でき、論理的にも首尾一貫した自然な統合ができあがる。
- つまり、空間にも時間にも制限されない神が宇宙を創造し、宇宙を治める数々の自然法則を設定した。不毛であったはずの宇宙を生物で満たすために、神は進化という見事なメカニズムを用いて、あらゆる種類の微生物や植物や動物を創造した。何よりも驚くべきなのは、知性、善悪の知識、自由意思、そして神との交わりへの願いを持つ特別な存在である人間を生み出すのにも、神は同じメカニズムを意図的に選んだことである。
- この考え方は、科学が自然界について教えるあらゆる事柄と一切矛盾しない。...この統合によって、信仰を持つ科学者の多くは、首尾一貫した、満足いく、有意義な視点をもつことができ、科学と信仰の世界観は共存できるようになった。これは信仰を持つ科学者が、神を礼拝し、科学の道具を用いて神の被造物の荘厳な奥義をひもときつつ、知的にも満たされ、信仰によって生かされることを可能にする。

2-2. ウェーバーとコリンズにみる「福音主義創造論」の多様化の様相

⑤ 太陽系形成の歴史



2-2. ウェーバーとコリンズにみる「福音主義創造論」の多様化の様相
⑥地球の誕生と人間の創造の経緯：45億年を1日24時間に圧縮すると



2-2. ウェーバーとコリンズにみる「福音主義創造論」の多様化の様相

⑦ ビッグバン

- 20世紀初頭には、ほとんどの科学者は宇宙には始まりも終わりもないと考えていた。...これにかわる仮説として、宇宙はある特定の瞬間に始まり、その後現在まで膨張したという考えが出された。しかし、観測データによって検証されるまでは、ほとんどの物理学者は真剣に取り合わなかった。そのようなデータを最初に提供したのは、1929年にエドウィン・ハッブルが行った、近隣の銀河が我々の銀河系から離れていく速度を調べた一連の有名な実験である。
- ドップラー効果（警察がレーダーで車のスピードを測定するのに用いる原理...）を用いて、近隣の銀河から届く光はどれも、これらの銀河が我々から遠ざかりつつある事実を示唆していることを発見したのである。遠い銀河ほど一層早いスピードで遠ざかっていた。
- もし宇宙のすべてが膨張しつつかなたへと遠ざかっているのなら、時間を逆転させれば、すべての天体は過去のどこかの時点で高密度の一点に集結していたことになる。
- ハッブルの観測を皮切りに、その後多くの測定が行われた。そして過去70年のうちに大多数の物理学者と宇宙学者は、宇宙はある一つの瞬間から始まったという共通見解を持つに至った。今日ではそれは「ビッグバン」と呼ばれ、計算によると約**140億年前**に起きたとされる。

2-2. ウェーバーとコリンズにみる「福音主義創造論」の多様化の様相

⑧ ビッグバンの前には何があったのか？

- ビックバンが実際に起ったとすると、それ以前には何があったのか、そして誰がビッグバンを引き起こしたのかという疑問が出てくる。
- これほど科学の世界の限界を思い知らせる現象は他にないであろう。ビッグバン理論が神学にもたらした意義も計り知れない。宇宙はまったく何もないところから神が創造されたとする伝統的な信仰にとって、これは感動的な結果である。...
- こう考えて畏怖の念にかられ、かつては不可知論者であったのに、すっかり神学的な物言いをするようになった科学者は一人や二人ではない。
- 「現時点では、科学には創造の奥義を明らかにすることは決してできないように見える。理性の力という信仰によって生きてきた科学者にとって、この物語の結末は悪夢のようだ。無知の山をいくつも登り、ついに最高峰征服が目前となった。やっとの思いで最後の岩によじ登ると、科学者を待っていたのは、何世紀もの間そこに座していた神学者たちだったのだから」...
- 神学者と科学者を近づけようと考えている人たちにとって、宇宙の起源に関する最近の発見には、相互認識を深めるようなものが多い。...
- 「今や天文学的証拠が、世界の起源についての聖書の見解へとつながっていくのがわかる。詳細は異なるものの、本質的な部分では、天文学が語る宇宙の起源と創世記の記述は同じである。人間の出現へと続く一連の出来事が、一瞬の光とエネルギーをもって、ある時、寸分の狂いもなく始まったのだ」
- ビッグバンを考えるとき、神の介入という説明を考えずにはおれない。

⑨ 太陽系と地球の形成

- しかし、その後の創造についてはどうか。ビッグバンから約100億年後、我々の惑星である地球が出来上がるまでの長い、延々と続く過程を、どう受け止めればいいのか？
- ビッグバン後、最初の100万年で宇宙は膨張し、温度は下がり、核と原子が形成され始めた。そして、重力によって物質が結集して銀河が形づくられた。その過程で回転運動が始まり、最終的には天の川銀河のような渦巻き状になっていった。
- 科学者たちは、我々の太陽は宇宙の初期にできたものではなく、むしろ二世代か三世代目の星で、星間ガスや宇宙塵の局地的な再集積によって約50億年前にできたと考えている。その過程で、周辺部の重元素の一部は、できたての太陽に合併されることなく、地球を含む太陽を周回する幾つもの惑星を形成した。
- 形成されたばかりの地球は、とても生命を育む環境ではなかった。非常に高温で、隕石の激しい衝突に何度も見舞われていた。それが次第に冷却し、大気が発達し、約40億年前頃までには生物の棲息が可能になった。
- そしてそのわずか一億五千年後には、地球は生物で満ち溢れていた。
- 以上の太陽系の形成の歴史は今や詳しく記述され、今後新しい情報によって書き換えられることはまずないだろうと思われる。

⑩地球上の生命の起源

- 生命の複雑さの問題について答えるにあたり、科学はまず年代史から始める。今でこそ、宇宙の年齢は約140億年であると分かっているが、100年前には地球の年齢すら分かっていた。
- しかし、その後発見された放射能や特定の同位元素の自然崩壊によって、地球上のさまざまな岩石の年代を決定できる、かなり正確でエレガントな方法が現れた。その科学的根拠は、...手短かに言うと、三つの放射性科学元素が徐々に崩壊し、その半分が別の安定した元素に変わるのにかかる時間（半減期）を測定の基準とするのである。
- ウランは鉛に、カリウムはアルゴンに、ストロンチウムはルビジウムという珍しい元素に変わっていくのだが、これらの元素の半減期は一定しており、よく知られている。これらの元素を測定することで、岩石の年齢を概算することができるのだ。
- この三つの独立した方法はすべて、地球の年齢に関して驚くほど一致した結果を出しており、だいたい45億5000万年と言われている。誤差の範囲はわずか1%ほどである。
- 40億年以上前にできた岩石には生命の痕跡がまったく見られない...。しかしその1億5000年後の岩石からは、複数のタイプの微生物が発見されている。これらの単細胞生物は、おそらくDNAを用いて情報を貯蓄することができ、自己繁殖し、さらに多様な異なるタイプの生物に進化することができたと推定される。...
- しかし、自己繁殖的な生物はそもそもどのようにして生まれたのか。現時点では分からないというのが妥当だろう。わずか1億五千年ほどの間に、前生物的環境にあった地球にどのようにして生命が誕生したのか、現時点では十分に説明できる仮説はない。

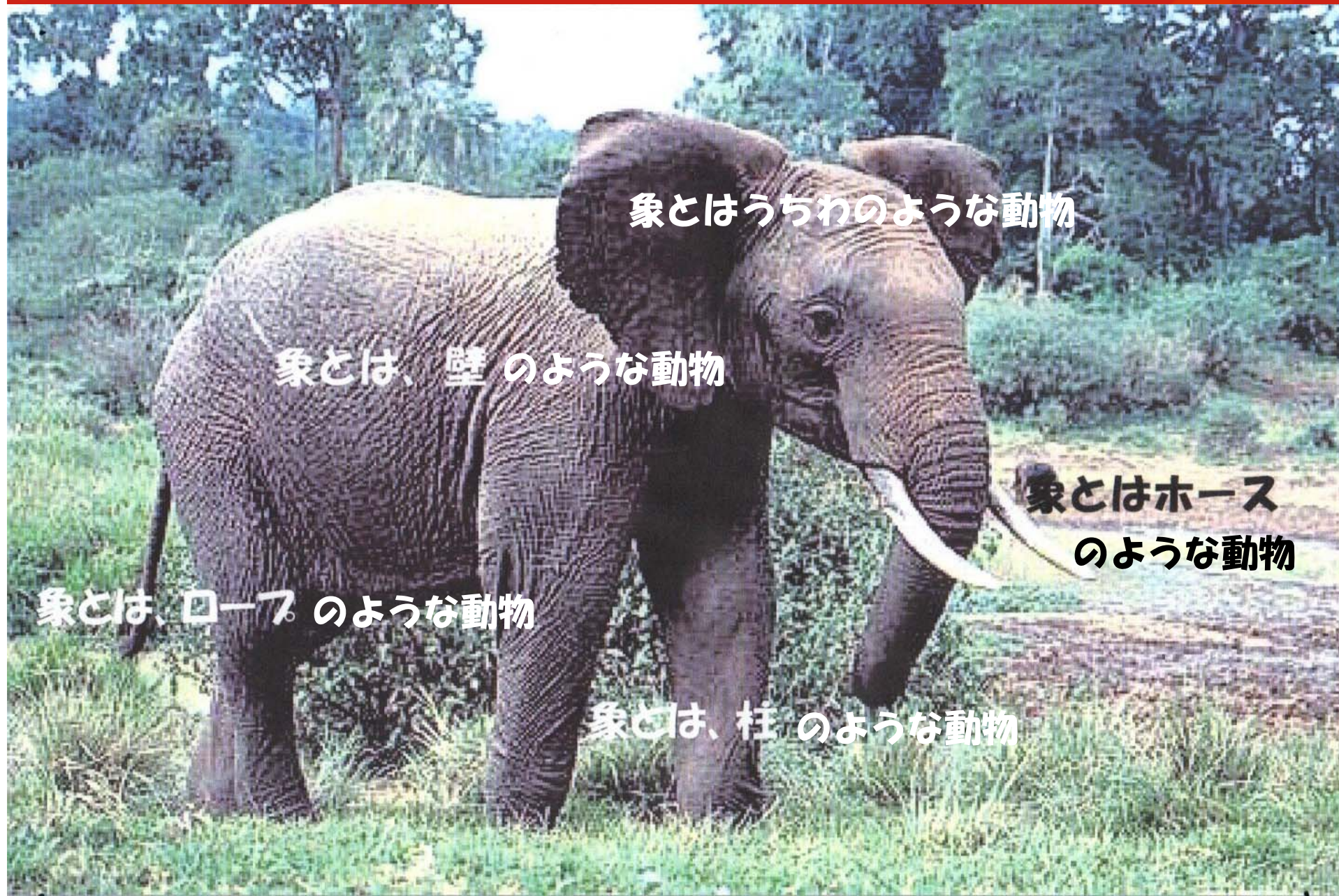
2-2. ウェーバーとコリンズにみる「福音主義創造論」の多様化の様相

⑪ 創世記は本当は何を語っているのか？

- 聖書の創造の物語—この文書が神の創造の物語を力強く、また詩的に記述するものであることに疑いはない。「初めに神が天と地を創造した」という文章は、神がいにしえから存在していたことを示唆する。
- この記述は、ビックバンの科学的知見と矛盾しない。続いて創世記一章には、一日目の「光よ。あれ」に始まり、二日目の水や空、三日目の土地や植物の出現、四日目の太陽、月、星、五日目の魚や鳥、そして忙しい六日目には地の動物、人間の男と女という、一連の創造のわざが書き記されている。創世記二章の記述は最初の記述とは完全には一致していない。
- これらの記述は一体何を意味するのだろうか。書き手は、一日24時間という長さをも含め、この順番通りに創造がなされたという、文字通りの正確な記述を意図していたのだろうか。もし文字通りであるなら、なぜ完全に一致しない二通りの話があるのか。これは詩的で寓話的な記述なのか、それとも文字通りに記された歴史なのだろうか。
- 創世記一章で使われているヘブライ語の「日（ヨム）」という言葉は、文字通りの一日を指す場合もあるし、象徴的に「時」や「時代」や「期間」などの意味で用いられる場合もある。
- アウグスティヌスは、「ここで言及されている『日』とはどういう日なのか、それを理解することは非常に難しく、おそらく我々には不可能なのだろう」（アウグスティヌス著『神の国』）と書いている。また、創世記の妥当な解釈は、おそらく何通りもあるだろうとも認めている。「これらの事実を考慮して、創世記に書かれている事柄を、私なりにさまざまな方法で分析し、解釈してみた。そして、我々の思考を刺激するために曖昧に書かれた言葉については、これこそ正しい読み方であると性急に決めつけることは避けた。他により適切な解釈がある可能性もあるからである。」（アウグスティヌス著作集16創世記註解1）
- 創世記1章と2章の意味については、今も多様な解釈が支持されている。25世紀にもわたる論争にもかかわらず、創世記1章と2章がどういう意味で書き記されたのか、その意図を正確に知る人はいないと言って差し支えないだろう。我々はそれを模索し続けるべきである。
- しかし、その模索において科学的啓示を敵視するのは間違いである。もしこの宇宙とそれをつかさどる法則を創造されたのが神であり、そして人間にこれらの営みをみきわめることのできる知能を与えられたのも神であるのなら、神は人間がその能力を放棄することを望んでおられるだろうか。人間が神の被造物について何か新しい発見をしたからといって、神がそれにおびえたり、神の偉大さがそれによっておとしめられたりするだろうか。

2-2. ウェーバーとコリンズにみる「福音主義創造論」の多様化の様相

⑫ 象と五人の目の見えない人



象とは、うちわのような動物

象とは、壁のような動物

象とは、ホース
のような動物

象とは、ロープのような動物

象とは、柱のような動物

⑬ 五人の目の見えない人と象

- ポストモダン神学がどうしても受け入れ、また利用しなければならない一つの洞察は、我々がある特定の視点から研究と思索を行っており、このことは我々の理解の範囲にある制約を設けているという事実である。これは、真理が相対的ではなく、絶対的なものであるという洞察である。
- だが、その真理についての我々の知識は、我々自身の限界に制約されるため、しばしば相対的なものとなっている。真理と真理についての認識との間にあるこの相違はしばしば看過され、その結果、不幸な結果を招いてきた。
- 基本的にプレモダンの人たち、批判精神が発展する時代以前の人々は、啓示された真理の客観性を堅く信じているゆえに、その真理についての知識は真理と同等であり、完全であるに違いないと考えてきた。
- 我々はポストモダニズムの洞察からどのように学ぶことができるのか。さしあたり、五人の目の見えない人たちと象についてのよく知られている物語をとりあげよう。
- 多元主義の唱道者は、真理は複数存在するというだろう。しかながら、距離を置いて物事をみる客観主義者は、こうした洞察のすべてについて、それぞれの視点からすればどれも正しいが、その正しさは部分的であり、それゆえ不完全であると語る。我々がなすべきことは、それらの洞察のすべてを参考にすることである。象がどのようなものであるかと言え、そうした断片的な理解のすべてを組み合わせたものなのである。
- このような洞察を結び合わせても真理全体には至らないかもしれないが、ほかでもないこの方法によって真理へもっと近づくことができるのである。 I -pp.190-191

まとめ

- 今回のシンポジウムのテーマにそって、
 1. まず、三つの時代の特徴を比較しつつ、ポスト・モダニズムの時代とはいかなる時代であるのかをみた。
 2. 次に、エリクソン著『キリスト教神学』を中心に、このポスト・モダニズムの時代において、聖書観・聖書解釈方法論・福音理解等がどのように変化しつつあるのかを分析した。
 3. 最後に、ポスト・モダニズムという多元化の時代において、福音理解の多様化現象を、コリンズの“バイオ・ロゴス”の内容と傾向を「広義の福音主義“創造論”再考」という領域で確認した。その中には、今の私たちには賛同できる部分とできない部分があることを理解している。
- 私たちがKBIで学んでいるエリクソン著『キリスト教神学』の立場は、オールト・アース派であり、中道保守的な“漸進的創造論”の立場であるが、
 1. 創造論における「地球の年代」に関する諸説の紹介と地質学研究への洞察等をみても、これまでとは異なる新しい地平に挑戦している。
 2. つまり18世紀以降の、被造物世界、また一般啓示の領域の研究である科学的学識との対話・交流を大切にし、ポスト・モダニズムの時代を背景にした「広義の福音主義創造論再考」への新しい道を切り開いているのである。
 3. 私たちは今、ポスト・モダン時代に生かされている。「これからの教会は、“広義の福音主義創造論：再考”という道筋において、何をどのように判断し、どのような方向に進めば良いのか？このことを考えていく上で、ひとつの“手がかり”としていただければ幸いである。

主要参考文献リスト

- 宇田進著『総説現代福音主義神学』 「第二部・第四章 ポストモダニズムの挑戦とキリスト教神学の‘脱構築’」等
- M.J.エリクソン著『キリスト教神学』 「第七章 ポストモダンと神学」
- R.Webber "The Younger Evangelicals" "Ch.5 Theology-from Propositionalism to Narrative"
- フランシス・コリンズ著『ゲノムと聖書』 「宇宙の起源、地球上の生命、神聖なる解説書を読み解く、創世記・ガリレオ・ダーウィン、創造論、ID、バイオロゴス等」